

話題の本棚

橋本努著『自由原理 来るべき福祉国家の理念』

ミシェル・フーコー著、フレデリック・グロ編、慎改康之訳『性の歴史IV 肉の告白』

特集／漫画

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚／注目の一冊

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/



UNIV. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

ウェルビーイング・個人と社会が共に幸福になる規範の構築

自由原理

来るべき福祉国家の理念

橋本努著
岩波書店



皆、最低限の生活保障に目を向けるばかりで、より善く生きるとは何かについて知らないのではないか——本書はまずそう問う。福祉多元主義といわれる今日において、政府は、民間や慈善団体と共に福祉を供給している。しかしこれらの供給主体をまとめる中核となるはずの福祉国家の理念がまた存在していない。どのようなウェルビーイング（善き生）を追求すべきか、理論と実践を包括する答を探すことで福祉国家の向かう先が見えてくる。

しかし、福祉国家の理念を明らかにしようとした理論がこれまでなかった訳ではない。例えば、コミュニタリアニズムに代表される「共通善」という概念や、リベラリズムが依拠する公私二元論は、公共にとって何が善かについての示唆を与えた。しかし、個人にとっての善について明らかでないため著者はこれらに賛同しない。

全五章からなる本書は、国家のみならず個人にとっての幸福とは何かを明らかにし、来るべき福祉国家に道筋をつける。第一章は福祉国家の思想理念を通史として描く。国家以外のアクターからの福祉供給が増えた現代では、従来の福祉国家の概念を辿るのみでは不十分である。そこで著者は相互扶助の倫理を視野に入れ、一三世紀のトマス・アクィナスの愛徳理念から福祉国家を論じる。ここには

著者の独自性が強く表れている。続く第二章では、アマルティア・センのケイパビリティ概念に様々な派生的意味を見出し、そのうちの一つである潜在的可能性としてのケイパビリティを詳しく検討する。これにより、従来の保障モデルとは異なる、新たな福祉国家像が説明可能になる。第三・四章では、個人の自由な選択を尊重しつつ公私共に良い結果がもたらされるような環境を政府が提供するリベタリアン・パターナリズムという概念について述べられる。著者は批判的検討をしつつ、この概念の有用性を説く。興味がある方はぜひ、本学教授那須耕介との共編者『ナッジ!!：自由でおせっかいなリベタリアン・パターナリズム』（勁草書房）も併せて読んでいただきたい。第五章では、経済学が提示してきた効用理論に幸福やウェルビーイングの理念を重ね、経済成長に替わる社会目標として幸福の指標化を試みる。ここには著者の「自生主義」「成長論的自主義」の立場が明確に示されているといえよう。

現代福祉国家に必要なのは、個人の善の追求を前提とし、更に社会の繁栄をも促進するような規範の構築であると著者は一貫して主張する。しかし本書は、福祉国家を副題とし、題名には自由原理を据えている。政府介入のある福祉国家は自由と矛盾するのではと感じる読者もいるだろう。そもそも、「自由」という語彙が多義的である。しかしだからこそ、自由を論じることが、どんな社会を構築すべきかについて考えるきっかけを与えてくれる。著者が示す福祉国家は、人々がウェルビーイングを追求できるための「自由」を保障する、新たな規範だ。

(三三四頁 本体四八〇〇円 2月刊)
(トントウ) (トントウ)

性に潜む、悪の所在を探して……。

性の歴史Ⅳ 肉の告白

ミシェル・フーコー著
フレデリック・グロ編
慎改康之訳 新潮社



近年新装版の刊行とともに感染症の研究者としても再注目を浴びているミシェル・フーコー。『綴葉』でも昨年一〇月号で「監獄の誕生」を扱い、一月号では『狂気の歴史』を扱った。規律権力や生権力など、権力の分析を行ってきたフーコーは晩年、「性の歴史」として性の言説分析を行っていた。ウィクトリア期から古代まで幅広く行われた歴史研究は最終巻が刊行される前にフーコーの死をもって未完に終わったはずだった。しかし死後三四年の時を経て、遺稿がついに刊行された。それが本書、『肉の告白』である。

まず『性の歴史Ⅰ 知への意志』の話から始めよう。近代では性の言説は抑圧されている。労働者の地位が上がる中で公に性癖を語ることは憚れ、性の乱れは社会的に断罪される。しかしまさにその抑圧ゆえにこそ性の言説は増殖する。誰もが他者の性に興味を持ち自身が性的に倒錯していかないか不安になる。性の言説は公には出てこないが、秘された場所で常に話題に上がっていた。

それは特に教会における「告白」で顕著となった。肉欲に苛まれ不安になる信者たちは、教会に行き自分の性癖、得てきた快楽、妄想などを詳細に語る。それこそが自己の検証であり信仰の強さを表すものだから。一方で教会は性の言説を記録し管理することで性の

基準を定め誘導していく機能を担っていた。秘された性は、主体の形成であり規範の基準となる場であった。

しかしいつ、性は悪となり告白の対象となったのか。フーコーは古代ギリシャまで遡り、性そのものは悪ではなかったことを記述する。そこにおいて「過剰さ」こそが悪であり、節制を守っているならば少年愛も肯定されていた。では転換はどこにあるのか。

『肉の告白』…アウグスティヌスについて

アウグスティヌスは結婚制度と童貞をどちらも聖なるものとして守ろうとした。もし性そのものが悪ならば教会が担ってきた結婚も悪になってしまう。彼が考えたのはエデンにおいてアダムとイヴを神が創ったことだ。神の創造において性があるならば生殖そのものは悪ではない。ではどこに悪があるのだろうか。

「アダムとイヴは知恵の身を食へたことで互いに性器を隠した」。アウグスティヌスはこの出来事から、神の罰を性器が自身のコントロールを離れたことに見出す。「非意志」としての悪。そこから結婚とは身体の中の悪をうまく使うことであり、童貞・処女とは悪にかかわらない生き方だと述べたのだ。ここにおいて、コントロールを外れたもの、非意志こそが悪となる言説が形成されていく。

再び権力論に戻ろう。統治が行き届いた社会において性や狂気など、コントロール不可能なものは排除されていく。それらは記録され、監視され矯正される。ここに権力の問題があるのなら、非意志の居場所を形成することに活路はあるのかもしれない。（きもの）

（副読本 仲止昌樹著『フーコー〈性の歴史〉入門講義』作品社）

（五七四頁 本体四三〇〇円 12月刊）

AKIRA

大友克洋著
講談社

昨年、社会現象にまでなった「鬼滅」ブームの裏側で密かに話題を呼び、再注目された漫画作品といえば、この『AKIRA』を置いてほかないだろう。1982年から90年の間に連載された、この古典的名作に描かれていたのは、奇しくもオリンピックの開催を間近に控えたネオ東京に巻き起こる、波乱の物語であった……。



時は、第三次世界大戦後の2019年。金田率いる職業訓練高生の「健康優良不良少年」たちがバイクを走らせていたある夜、その先陣を切っていた鉄雄は不審な小男と接触事故を起こす。この事故がすべての始まりだった。けがの回復後、不思議な超能力を開花させた鉄雄は、その力の赴くままに暴走を始める。一方金田は、その小男や謎に包まれた存在「アキラ」を追跡する反政府ゲリラの少女・ケイに出会う。日く、軍（アーミー）が秘密裏にその研究を進めていたとされる存在「アキラ」——その陰謀の鍵を握る軍の大佐とロボのドクターたちは、鉄雄の覚醒にも強い関心を寄せていく。果たして「アキラ」とは一体何者なのか。その謎に迫るケイたちゲリラと、鉄雄の暴走に立ち向かう金田たちの思惑が交錯する中、ストーリーが紡がれてゆく。

話自体の面白さもさることながら、本作最大の魅力はやはりその緻密な作画にある。80年代に想像された近未来都市の繁栄、都市戦における軍のメカニック——これ以上ないところまで細かく描きこまれたコマひとコマに、私たち読者は圧倒される。さあ、そのページを開いて、金田たちの世界に飛びこんでみよう。彼らの生きた未来さへ過去となった現在ではあるが、そこにはまた、私たちの冒険心をくすぐるものがある。（八雲）

（第一巻 358頁 本体1500円）

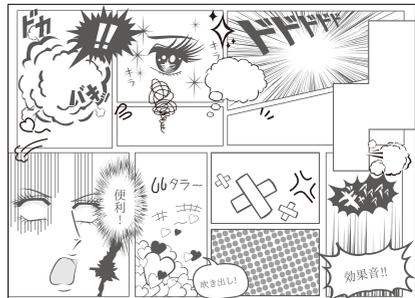
特集

漫画

映画化・アニメ化だけみて、それで満足してない？ ダメ。全然ダメ。もちろん映画やアニメも面白いけど、ページをめくって、一コマ一コマを味わわないと分かんない世界ってのがあから。漫画には漫画でしか味わえないモノってのがあからってわけ。

でも、本屋さんに行っても、漫画アプリをみても、もう漫画の洪水。こんなにたくさん作品があったら、どれを読めばいいかわかんないじゃん？ だから、今回、うちらで漫画特集組んだから。とりまタートルだけでも知ってって！

（出席点）



阿・吽

おかざき真里著 阿吽社監修
小学館

——丘巻だ。もはや言葉
を添えることに蛇足を感じ
てしまうほどに。

最澄と空海。ともに日本
仏教において歴然と輝く巨
星であり、誰もがその名前
を忘れることはない。だが
その天才たちは同時代をいかに生きたのだろ
うか。本作は、仏教の真髓に近づいた二人の
天才の、その交流を描いている。衆生すべて
を救うために山にこもり高みを目指す最澄、
真理への飢えから自らに過酷な行を課す空海。
ふたりの人柄は対極的だ。ともに遣唐使とし
て唐にわたり、密教を日本に持ち込みながら
「平安」という世の政に巻き込まれていく。

数々の名シーンの中でもやはり空海が自分
の名を見出す所は白眉だろう。自身の運命を
引き受けていく最澄に比べ、空海はいつも危
うさと隣り合わせにいる。いつ死んでもいい
覚悟で生きている彼は、生死の境をさまよう
行「求聞持法」の中で空と海に阿を見出す。
粗暴な少年が極限の中で自身を見つけた姿に、
涙を流さずにはいられない。

しかしこの漫画を傑作たらしめているのは、
物語だけではない。その画だ。あなたは唸る
はずだ、俗世の中で迷い溺れていく修行僧の
姿に。そして溜息をつくはずだ、混沌の中
でも仏のように微笑む僧侶の表情に。粗ら
しくも繊細で、見るものすべてを抱きこむ、
仏画のような筆遣い。物語と合いました本作は、
読んでいただけで教訓が頭に浸り込んでいく。
意識の奥に潜む無意識のさらなる深部、阿頼
耶識へと……。

釈迦の教えは常に対話を通し、物語の形
で伝承されてきた。末法の世で伝染病が流行
る現代において、仏教の教えは漫画となって私
たちの手元に届いている。 (きもの)

(第一巻 228頁 本体600円)

応天の門

灰原葉著
新潮社

本書は一言で言えば、「平
安版シャーロックホーム
ズ」だ。ホームズが道真、
ワトソンが業平。色男と学
者がタッグを組んで、平安
の京の「怪事」を暴く。



世の中に／たえて桜の／なかりせば／春
の心は／のどけからまし

平安随一の色男には、日々事件が絶えない。
通う先の女が物怪に襲われる、中国から呪わ
れた書物が届く、政敵・藤原氏に目をつけら
れる……困り果てた彼は、まだ若き文章生・
道長に解決を依頼する。

東風吹かば／にほひおこせよ／梅の花／
あるじなしとて／春な忘れそ

若き学者は、日々部屋に籠もりきりになり、
学問に明け暮れている。彼は市井の出来事な
どには全く興味がない。いわんや朝廷の政を
や、だ。政界の事件に巻き込まれないように、
彼は業平とも距離を取ろうとする。しかし、
甲斐性と好奇心が働いて、徐々に世の事件に
関心を持ち始める。こうして二人の才が平安
の都で交わり始める。

平安の京を知り尽くす男と、学問の世界に
生きんとする男——一見対照的に見える両者
が、いかに怪事を解決するのか、それが本書
の見所だ。また両者の存在のみならず、政界
で暗躍する藤原氏の存在も見逃せない。まさ
に「ものけ」のような存在に、二人の才は
いかに立ち向かうのか。

令和の京都で平安の都に思いを馳せる。事
件の現場に足を運ぶのも一興だろう。二人の
男から、目が離せない。 (出席点)

(第一巻 202頁 本体638円)

風の谷のナウシカ

宮崎駿著
徳間書店

名を挙げるまでもない国民的映画、『風の谷のナウシカ』。そこでは切り落とされてしまった多くの登場人物や物語が、本書では7巻にわたって語られる。

舞台は「火の七日間」と呼ばれる戦争によって、産業文明が崩壊してから1000年後の未来。巨大な蟲達が棲む「腐海」という菌類の森が有毒の瘴気を撒き散らし、人間の生存を脅かす。主人公ナウシカは、風の谷という美しい国の次期女王である。彼女は11人の兄弟がいた中で唯一育った子だが、母が彼女に向ける愛は、失った子達への悲しみに勝ることはなかった。自身が愛に飢えて育つも、人々や腐海の生物たちに、惜しみなく愛を向けるナウシカ。希望の光を失わず、人類と腐海が共存する未来を求める彼女だが、彼女の心の中に潜む闇との葛藤にも苦しむ。

他にも多くの人物が登場するが、彼らは混沌とした世界を厭い、他者といがみ合う。評者は、ナウシカは勿論のこと、そうした彼らにも強く心を惹かれる。なぜなら、絶望に打ちひしがれる彼らが、再度誰かを信頼し前を向くことこそ、強さや柔軟さが必要だからだ。消せない憎悪の念があっても、他者を許し、愛し、ひたむきに生きる彼らの隣には現代社会に生きる我々の影がある。そうしたことは、人類の定めなのかもしれない。

こうして宮崎駿の世界観に入り込むと、対立する人やモノは同じ線上にいたりと感じる。人間の目には醜くうつる生物であっても、人間と等しく生命がある。無残にも敵を蹴散らす戦士でも、仲間の死を愛をもって悼む。自分と対極にいる誰かや嫌いだった何かを愛してみようか。人間がいくら汚れていようと、世界は美しいのだ。 (トントウ)

(第一巻 136頁 本体430円)



未来のアラブ人 中東の子ども時代

リアド・サトッフ著 鷗野孝紀訳
花伝社

衰退を指摘される書籍業界だが、マンガは変わらず人気である。海外でも日本のマンガが高評価を受けているのは話題になるが、翻って我々は海外のマンガについてどれくらい関心を持っているだろうか？ というところでここでは海外のマンガ作品を取り上げてみたい。

現在のようなコマ割りストーリー漫画という形態の発祥は実はフランス。現在でもフランスではアングレーム国際漫画祭という祭典が開かれ、『AKIRA』の大友克洋や水木しげるなどが受賞している。本作はこの漫画祭で二〇一五年に最優秀作品賞を受賞した。作者リアド・サトッフが自らの幼少期の体験を作品化したものであり、少年リアドの目を通して当時のアラブ社会の様子が描かれている。

フランスでアラブ人の父とフランス人の母の間に生まれたリアド少年は父親の都合でリビアに移住する。当時のリビアは独裁者カダフィ大佐の下、社会主義的國家運営がなされていた。しかしその中で異邦人であるリアド親子は疎外の憂き目に遭う。そんな彼らが次に移住したのがアサド独裁政権の敷かれていたシリア、父親の祖国だった。が、ここでも彼らは余所者として扱われる。特に色白のリアド少年は肌の色で人種的ないじめを受けることもあった。多様性を備えた「未来のアラブ人」を父親から囑望されたリアド少年は、多様性が実際には同胞であるはずのアラブ人からどう扱われるのか、その醜さと愛おしさを容赦無く見通す。

ちなみに本作は昨年の文化庁メディア芸術祭マンガ部門で優秀賞を得ている。日本の漫画とはまた一味違う海外漫画を読んでみてはいかがだろうか。 (ねこ)

(第一巻 168頁 本体1800円)



銀のアンカー

三田紀房・関達也著
集英社

楽しい漫画特集の最後を「就活」漫画で締めることになった。著者は『ドラゴン桜』などで知られる三田紀房。強い言葉で人々を導くカリスマと、泥臭い努力で成長していく主人公を描く作風を苦手とする人も少なくない。



本書もそのような三田節全開の漫画である。今回の主人公は、「女子アナ」志望の女子大学生と、やりたいことが見つからない男子大学生。二人はカリスマヘッドハンター・白川と出会い、ひょんな縁から就活指導を受け始める。本書が出版された2007年は就活氷河期を抜け、売り手市場だった。そんな時代背景だからこそ、「とにかく食っていくため」ではなく、「自分が本当にやりたい仕事をしたい」という思いは強くなる。そんな学生たちに対し、白川はデータから見える厳しい現実を突きつけ、時には「とにかく本気でやれ」と彼らを突き放す。すでに時代錯誤に思えるような描写も少なくない。しかし、就活に「本気で」取り組む学生の熱意は、率直で眩しい。最終巻で主人公は圧倒面接に屈せず、ここまで言えるようになる。「私達だって毎日生きるか死ぬかの真剣勝負してるんです。大人だって学生ナメないで下さい」。

「就活を通して成長する」——冷笑する京大生も多いだろう。しかし手段は何であれ、ここまで自分に自信を持てたのであれば、それは紛れもなく「成長」ではないか。本書を読み、思わず斜に構えてしまうのか、そうではないのか。そこには「青年」と「大人」の境界線がある。思い出の漫画、好きになれなかった漫画……数年先に読み返すと、また違った印象を持てるはず。その時々^{いまま}の漫画の感想が、あなたの現在を写している。(石透)
(絶版 第一巻 209頁 本体514円)

少年のアビス

峰浪りょう著
集英社

家族という楔によって閉塞的な「町」に縛られ、自分の人生に失望していった少年・黒瀬令児。しかし、青江ナギとの出会い、そして心中への誘いが、彼の心の深淵を引き摺り出しいく。



人間関係で雁字搦めになってしまう「村」社会への嫌悪とそこから逃れられない苦しさ、繰り返される逃避行とその挫折……ここまで陰鬱な物語が紡がれる漫画は類を見ない。作者の峰浪りょう氏は、代表作『ヒメゴト～十九歳の制服～』を読んでもわかるように、生々しい人間の欲望と不自由さを描くことに関して、非常に秀でていると考える。この才能は、他者が抱える生きづらさへの共感と、個人の苦しみを徹底的に白日の下に晒そうとする気概がなければ成立し得ないものだ。

真っ当に育った好青年にも見える令児が、死の淵で発する狂気じみた独白は、決して見たいはけくないものを覗き見てしまった感覚を、読者に与えるだろう。作中では、様々な登場人物の独白が描かれるのだが、そのいずれもが脳裏に焼き付いて離れない。誰もが自分の欲望に狂い、他者に対して牙を剥き始める。しかし、一人一人の心の深淵は、そのどれもが痛い憐憫の情を向けてしまいそうなものであり、断罪することなど決してできはしないのだ。一本も吸わないまま積み上げられたタバコの箱に、貴方は何を思う。

正直、本作を人に薦めたら神経を疑われてしまうかもしれないと思った。それでも、評者はこの深淵を覗く共犯者を強く欲してしまう。セクシャルで暴力的な青年漫画だからこそ表現できるリアリズムを、知らないままでいたかった誰かが生きる現実を、知ってほしいというエゴを込めて。(ましゅ)

(第一巻 208頁 本体630円)

新刊コーナー

灰の劇場

恩田陸著
河出書房新社



灰色の劇場に、白い羽が降り注ぐ。それは悲しくも美しい一瞬だった。

新聞の三面記事にそれはあった。同棲中の女性二人が飛び降り自殺。両者は大学時代の友人で、同棲中だった。たったそれだけの記事が、なぜか「棘」として心に残り続けていた。その人物は、三面記事の記憶を頼りに、「事実をもとにした」小説を書き始める。本書のBGMは、常に灰色だ。灰色の景色に、灰色の人間。灰色の音楽に、灰色の恋。本書に描かれる物語は、曖昧という名の灰色のベールで覆われている。小説を書く女。飛び降りた女・MとT。0・1・(1)で章立てされる物語——。誰の視点で描かれているのか、また、いつの年代の話なのかも判然としない。本書は徹底的に灰色に塗りつぶされている。

そんな世界に色を与えるのが、「灰色の劇場」だ。女が書いた小説は劇になり、廃墟の

ような建物で公演される。その劇のシーンでは、白色が特徴的に描かれる。M役とT役が着る、白いワンピース。会場に降る、白い羽。灰色にコントラストを与える、白。「リアル」の世界ではなく、劇場という「虚構」の世界において、世界に色を与えられる。「虚構」の世界において、登場人物は生き生きと動き出す。この虚実の世界の対比が美しい。

灰色の劇場に、白い羽が降り注ぐ。それは悲しくも美しい一瞬だった。この世界も、また一つの劇場なのかもしれない。自分という存在も、また一人の演者なのかもしれない。

(出席点)
(三五三頁 本体一八七〇円 2月刊)

カメラじゃなく、写真の話をしよう

嵐田大志著
玄光社



写真の撮り方を学びたいと思い、書店に向かったとする。するとカメラ・写真のコナーにズラリ

と並ぶのは、シャッター速度の調節や構図のパターン等、テクニクについて解説してい

る本ばかりなのではないか。

そんな中で本書は、カメラではなく「写真」に焦点を当てた。写真とは何か、なぜ写真を撮るのかを問ひかけた上で、自分の目的に合った撮り方のヒントを教えてくれる。

「写真って、同じように撮れば誰が撮っても同じ作品になるんじゃないの？」以前友人が言っていた。本書を読んだ後なら、「そんなことはない」と強く言えるだろう。世界の見え方が人それぞれ違うように、同じものを写していても、表現の仕方は人によって変わっていくはずだ。

著者曰く、「写真道」は「問口が広く、奥が深い」。何を撮るか、あるいは撮らないか誰かに見せたらう為に撮るのか、自分だけで楽しむのか。思い出の記録なのか、表現したい世界があるのか。写真を撮ることがあまりにも当たり前になった今、こうした疑問を自分に問ひかける人は少ないのではないか。だが、自分が写真を撮る目的が明確になって初めて、テクニクは生かされるのである。

この本に書かれているのは著者が写真について悩み考えた軌跡である。本書を読んだからと言って、写真の「正解」は決して分からない。写真を撮るといふことは、「自分だけの答えを探す孤独な旅」なのである。(荏漢)

(一九二頁 本体二〇〇〇円 1月刊)

江口寿史美人画集 彼女

江口寿史著
集英社インターナショナル

「彼女。」

その響きは何を意味するだろう。英語の she ではとらえきれない独特のニュ

アンス。届くことのない憧れと、戻ることのない喪失を意味する言葉。

漫画家でありジャケットや広告でも活躍する江口寿史のイラスト集。四〇年に及ぶ仕事の中から女性像だけを厳選した本書には、日本のポップカルチャーを代表するような作品が散りばめられている。時代時代の少女達を描いてきた江口の作品を見ると、若者文化やファッションの変遷も見えてくる。

「美少女のいる風景」「ワインを持った女たち」「音楽とファッション」。それぞれのテーマをもとに構成された本書には、切り取られた青春のページがこれでもかと載っている。一緒にお酒を飲むときの笑顔、ともに音楽を楽しんだ日々、旅行に行きつて朝まで語り合った夜。——そんな時間はなかったはずだ。そんな時間はなかったはずなのに、ありえたか

もしれない日々と想えてしまうのだ。それほど彼女たちは心を許した表情で、まるでアルバムに収められた写真のように、こちらをむいて微笑んでいるのだから。

人生はからくりで満ちている。日々の暮らしの中で、無数の人々とすれ違いながら私たちは出会っていかない。その根源的な不遇がありえたかもしれない「彼女」を理想化させる。憧れのある子を。——江口寿史はここ数年「彼女展」を開催している。興味があればそちらも足を運んでみてほしい。(きもの)

(二八八頁 本体四五〇〇円 3月刊)

詩集 言葉のない世界

田村隆一著
港の人

言葉なんかおぼえるんじやなかつた

言葉のない世界
意味が意味にならない世界に生きてたら
どんなによかつたか

戦後最大の詩人田村隆一の代表詩集『言葉のない世界』が半世紀ぶりに帰って来た。先

の引用は、本詩集所収の詩「帰途」の冒頭だ。どこかで見ることがある、そんな方もあろう。一行目の句が贅す印象は鮮烈だ。言葉を「おぼえる」ことが決して寿がれず、むしろ喚かれるのだから。ではもしも言葉がなかったなら、どんな世界を私たちは生きるのだろうか。

第三連で彼は言う。「あなたのやさしい眼のなかにある涙／きみの沈黙の舌から落ちてくる痛苦／ぼくたちの世界にもし言葉がなかったら／ぼくはただそれを眺めて立ち去るだろう」言葉がなければ、大切な「あなた」の悲しみも、愛する「きみ」の苦しみも、何の意味もないと心に止めない。身軽な関係だ。

だが人間とは愚かで、身軽なればこそ、結局は自分を留めてくれる誰かが欲しくなる。詩の最後を見てみよう。「ぼくはあなたの涙のなかに立ちどまる／ぼくはきみの血のなかにたつたひとりで帰ってくる」田村は分かっているのだ、人間は決して言葉を手放せず、言葉によって誰かと繋がって生きるしかない。本詩集所収の詩にはどれも、田村の言葉への責任、諦め、そして情熱が刻まれている。今日も私は田村の言葉に触発され、シャイで気まぐれなあの人に短いメールを送る、「大好き」と三文字の言葉を添えて。(リンダ)

(四八頁 本体二〇〇〇円 4月刊)

「本書はもっと早くに翻訳されるべきだった」と訳者あとがきにはある。ネットメディアの政治的可能性に失望させられた今、本書の主張は確かに古めかしい。だがこの遅れた翻訳にこそ、新たな意義が見出せるはずだ。

著者ジェンキンスは事例分析に頁の大半を割き、エンタメ文化に多大な介入を果たしたファンの姿を描写している。テレビ番組のネタバレや推理、映画の二次創作といった営みが、特にネットに早くから親しんだ者達の手で盛り上がりつつゆく。この流れは、話題に上る『マトリックス』や『ハリリー・ポッター』にハマった者なら、本書を読まずとも分かるだろう。この研究書の独創性はむしろ、エスノグラフィ的手法やクイア理論から多くを学び、多様な個人々々による参加型文化の楽しさを評価した所にある。その喜びを民主的、政治参加への架け橋とみなす著者の主張は、夢に溢れた往時の電子の海を彷彿とさせる。



そう、それは訪れなかった未来だ。それどころか人々は、「お前はクビだ」が決め台詞のテレビ屋を合衆国の長にした。彼が退いた後も、その原動力となった嘘と暴言の情報社会は続いている。本書が示唆していた理想郷に、我々はこの一〇年で辿り着けなかった。この事実を突きつける点に、遅ればせの邦訳がもつ批判的意義がうかがえる。

また遅れた者なら、先人に学ぶこともできよう。幸い口喧しいオタクは、今も至る所で健在だ。本書が示す享楽の力で、今再び「解釈違い」に向き合おうではないか。(とよ)

(五五六頁 本体三七〇〇円 1月刊)

はじめての ワイトゲンシュタイン

古田徹也著
NHKブックス

初期分析哲学の代
表格・ワイトゲン
シュタイン。本書はこ
の、「生き様が哲学



の二部であり、哲学が生き様の二部であるよ
うな」人間が歩んだ生涯を辿ってゆく。

序章を除き、本文は三つの章からなる。す
なわち、彼が主著『論理哲学論考』最終部に

示した「語りえないもの」たちの実態を明らかにする「前期」の章。彼の用いる「像」なる概念が「世界のあり方を写す模型」から「物事を捉える特定の見方」へと変化したことを跡付けつつ、哲学的主張に含まれがちな「混乱」とその誤りを論者たち自身が自覚するよう促した「治療」なるアプローチに言及する「後期」の章。そして最終第三章では、「心」や「知識」といった主題に対する、「この孤高の哲学者最後の格闘を詳説する。」「規則のパラドックス」をめぐる(いささか狂気じみた)思考実験や、「言語ゲーム」「家族的類似性」といった鍵概念に触れるのはもちろん、述語論理の込み入った知識を前提とせず読み進められるのも、彼の思想に「はじめに」触れる読者にはありがたい。

終盤、ワイトゲンシュタインの遺稿は「そのつどの自分のあり方を映し出す鏡」に喩えられる。彼の著作の多くは大小様々の断章からなり、これら「素材」の調理法は読者の手に委ねられている。そして、読者がこの「素材」の輝き具合に自らの哲学的関心の在り方に気付くとき、彼の残した言葉はまさに「鏡」となる。果たしてあなたはそこに、どんなワイトゲンシュタイン像を見出せるだろうか。まずは本書を繕いて確かめたい。(八雲)

(三二〇頁 本体一六〇〇円 12月刊)

マザリング 現代の母なる場所

中村佑子著
集英社



本当に不思議な本
だと思う。これはい
ったい何についての
どのような本なのか、

うまく言い表すことができないのだ。現に、
著者はこう述べている。「もうこれは論考な
のか、エッセイなのか、文学なのか、願いな
のか、祈りなのか、わからなくなつてゆく」
と。だが、あえて言い表すとすれば、本書は
「この社会に今、マザリングをもっと——」
という一つの祈りなのではないかと思う。

マザリング（＝母を行なうこと）は、性別
を超えて、ケアが必要な存在を守り育てるこ
とを意味する。それはまた、自分や他者の痛
みに鋭敏になりながら他者に寄り添うこと、
生命のもっともそばにいること、そして生き
てほしいとただ願うことでもある。母になら
なかった人や母にならなかった人、母にならな
いと決心した人や養子を迎えた人へのインタ
ビューを通してこの概念にたどり着いた著者
は、今この社会にはマザリングが欠けている
ことを痛切に認識する。弱き存在、痛みを抱

えた存在に手が差しのべられることはない。
彼らは一人、膝を抱えて押し黙っている。

そこで著者は、女性の身体に一つの可能性
を見出す。女性の身体は、赤ん坊という他者
をその内に潜在的に宿している。そこにほっ
かりと空いた穴は、自己同一性にゆらぎをも
たらず。女性の身体は、潜在的に他者に開か
れている。ゆえに、他者の痛みを感じ取り、
それに寄り添う社会を形づくるための手がか
りが、そこにはある。

性別を超えて人びとのなかに眠る「母」な
るものを、この社会に今——。（ば）

（三二二頁 本体二〇〇円 12月刊）

台湾、あるいは孤立無援 の島の思想

呉叡人著 駒込武訳
みすず書房



最近、コロナ感染
予防対策で話題にな
った台湾。親日であ
り距離的にも近く、

旅行先として人気も非常に高い。だが台湾に
関してなんとなく見過ごしている点がある。
そこは「一国」と呼べないのだ。長年中国本土
の支配下に置かれ、その後日本の支配下に移

され、第二次大戦後には大陸から逃れた国民
党政府によって「中華民国」そのものとされ、
国であることをやがて否定された地域、台湾。
常に「帝国」へと従属させられてきたとい
う立場でいかにして生き延びるか。本書では政
治学に身を置く台湾人の著者が自らの知見を
もとに、台湾の人々の置かれた状況を整理し
ながら存続の可能性について試行錯誤を重ね
る。

「帝国」の周縁としての立場に置かれ続け
た台湾。著者はその事実を直視するために
「賤民」というアイデンティティを掲げる。

だが賤民が生き残るためにも発言力が必要で
あり、そのためにはまともななければならない。
台湾の中には原住民、移住漢人、そして
特に大戦後に逃げてきた国民党の立場の人間
という重層的なアイデンティティの差があり、
そこには同時に差別・被差別の歴史もある。
彼らの和解をいかにして作るか。問題は山積
し、著者は時に悲観する。だが師ベネディク
ト・アンダーソンの思い出が彼に進む気力を
再び与える。

「もっやあってられない、でももっやっていくの
だ」……。時折挟まれるベケットなど文学の
言葉が印象的である。隣人をもう少し見守っ
ていきたい、そんな一冊である。（ね）

（四六四頁 本体四五〇〇円 1月刊）

接面を生きる人間学

鯨岡峻 大倉徳史著
ミネルヴァ書房



それまでの客観主義的な心理学では明らかにし得なかった、それぞれが一つの

「主体」として生きる我々の生の諸相に、関係発達論は立ち向かってきた。保育やデイケアなどの様々な対人実践は、現場にいる子供たちや患者、利用者たちと心を通わせることで、彼らの本当の困りごとを感じ取り、真のニーズに応えていくことができるはずである。それを果たしていくために必要な「共に生きる」ことは、どのようなことであるのか。本書は、著者たちの研究室に所属している在学学生や卒業生の研究が掲載された論文集であり、主にエピソード記述という手法を通して、「共に生きる」といふこの本質に迫る。

実を言うと、評者も大倉研究室の門弟であり、本書に参加されている研究者の方々の半数は知り合いだった。普段のゼミで触れている資料が、このように結実していくのだと思うと、少し感動的な気持ちを感じた。

しかし、改めて考えさせられるのは、エビ

ソード記述という研究法の難易度の高さである。対象と触れ合う中で、主観的に感じられたことをメタ分析しつつ記述していくその手法は、幾度となく批判に晒されてきた。

それでも、定量的に表せないような気持ちの交流や行動把握だけでは見えてこない心の変容が、実践の場で数多く起きていくということも、決して無視できない事実だ。第三者には掴みにくいが、確かにそこで捉えられた現象を伝えていく。それは未来の実践者への道しるべになるのだろう。(まじゆ)

(三七六頁 本体三八〇〇円 4月刊)

ヴァレリー

芸術と身体の哲学

伊藤亜紗著
講談社学術文庫



様々な身体を生きる人々の体験を見事に描き出した美学者・伊藤亜紗。本書は伊藤の博士論文をもとに出版された文庫本である。

ヴァレリーは経験などの散文的要素を排した「純粋詩」を提唱した詩人である。彼は一八九四年から没年の一九四五年まで、二六一

冊もの私的な思索ノート『カイエ』を書き続けた。伊藤は彼の膨大なテキストを丹念に読み解き、彼にとって「詩」とは、読者を「行為」させ、身体機能を開拓する「装置」であったと論ずる。そこには「詩論」と「生理学」という奇妙な結びつきが想定されており、伊藤はその結びつきを、彼の時間論と身体論を媒介に明らかにしようとする。

抽象的で難解な印象を持つだろうが、自らの身体に注意を向けながら読み進めてほしい。「略」この手、わたしの顔に触れようと夢みながら、ぼんやりと、何か深い目的にでも従っているのか。この手は待っている、わたしの弱さから涙がひとしずく溶けて流れるのを。(略) (『若きパルク』一〇二頁に掲載)

詩を声に出して読み、伊藤の解説を読む。すると、普段意識することのない、身体を持つ様々な「機能」が感じられるはずだ。読者の「機能」を開拓させる伊藤の文章も、ヴァレリーの論ずるところの「詩」なのであろう。別々の身体を生きる個人々の体験から普遍妥当なものを見つけるのは「夢」のようなものだ。しかし伊藤はヴァレリーの著作と出会い、その「夢」を信じられるようになったという。本書の「おわりに」ひとつの夢を本気で見ることに伊藤の原点を見た。(石遠)

(三二二頁 本体二二六〇円 1月刊)

はじめての動物倫理学

田上孝一著
集英社新書

私たちは動物とどう付き合うべきか。動物の運命は人間の手によって支配されてしまっていて良いのか。人間の文明や生活は、「常に人間が主体であり、動物は客体」という無意識的な前提によって成り立っている。

デカルトの動物機械論や、カントの動物を物件として捉える考え方は、動物実験や、労働力としての馬の利用を正当化した。現代においても、肉食のために動物を非道な方法で大量生産したり、鑑賞のために隔離された環境で動物を飼育したりすることは、一般的なことだと目を瞑られている。

だが、例えば全ての人が肉食を辞めビーガンになるとするのは、今の世の中では非現実的である。いくら立派な規範でも、万人が実行できなければ意味を持たないと著者は言う。人間社会は、動物を都合良く利用することを前提に成り立っており、後戻り出来ないところまで来てしまっているのではないかと怖くなる。本を閉じてふと横に目をやると、スパーのチラシに描かれた陽気な豚のイラストと目が合った。

(二六四頁 本体八八〇円 3月刊)
(荒漢)

西洋美術とレイシズム

岡田温司著
ちくまプリマー新書

題名の西洋美術は大きくキリスト教絵画を指す。その伝統の中で聖書の挿話が図像化される際、非白人はとう用いられてきたのか。本書の図版と解説は、その諸相を抉り出す。

西欧の美術と思想に通暁している著者は、それらの本源と呼ぶべき神の言葉を個別の造形芸術と比較していく。すると直ちに、解釈や脚色による差別の意図が見えてくる。

例えば『創世記』一六章以降にあるハガルとイシマエル母子の追放の場合、彼女らは時代ごとの敵対者や異邦人に重ねられる。十字軍時代の彫刻では弓を持ったムスリムとして、一七世紀にはそれと分かる装飾により印づけられたいわゆるシプシーとして。稀な例として、黒い肌のハガルを描いた作品も挙げられている。奴隷貿易時代の作である。

新書ながら多岐に渉る文献表が巻末に附されている。文中の至る所で、頁数と共に参照文献が指示されている。そこから読者の学びは広がるだろう。そして何よりその真摯な姿勢が、未だレイシズムに鈍感な日本社会の中心で本書を必読の書たらしめている。

(一九三頁 本体一〇〇〇円 12月刊)
(97)

広島平和記念資料館は
問いかける

志賀賢治著 岩波新書

「七五年は草木も生えぬ」。原子爆弾の製造に関わったジェイコブソン氏が、原爆投下後の広島について語った際の言葉だ。被曝の記憶を継承してきた資料館の歴史を紹介する本書は、まさにその被曝後七五年目となる二〇二〇年に最も相応しいものである。

本書は、二〇一九年に完了した同館の展示更新について、その経緯と意図を説明するもの。その中で明らかになるのは、現在の平和記念資料館が、まさに書名にもあるとおり「問いかける」存在であろうとしていることである。即物的な答えを示すのではなく、見るものが、その想像力を駆使して「死者と対話」するための場になろうとしているのだ。

資料館への道案内から始まる、風変わりな構成も、読めばその意図がわかる。この案内を頼りに実際に資料館を訪れ、私たち自身が感性を研ぎ澄ましながら「問いかけ」に向き合うことを求めているのである。資料館がたどってきた道を示す本書は、言葉のあらゆる意味で、最良の「道案内」といえよう。

(二四八頁 本体八六〇円 12月刊)
(投稿・昌平)

誕生肯定の思想——反出生主義を超えて

一つの新しい生命がこの世界に生まれ出すこと、すなわち子どもの誕生は、古くから多くの人びとによって言祝がれてきた。たとえば、インドの詩人であるタゴールは、「すべての赤ん坊は、神がまだ人間に絶望していないというメッセージを携えて生まれてくる」と詠い、ユダヤ系ドイツ人の思想家であるアーレントは、「私たちのもとに一人の子どもが生まれてくること」を一つの奇蹟であるとして、子ども誕生という出来事をその政治哲学の中心に据えた。子ども誕生（＝出生）は、希望に満ちた悦ばしき出来事だったのだ。

しかし近年、出生を肯定するこうしたあり方とは真っ向から対峙する思想、つまり出生を否定する思想が、人びとのあいだでにわかに支持を集めつつある——反出生主義（anti-natalism）がそれだ。

反出生主義は、生まれてくることおよび産むことを否定する思想であり、誕生に関しては「生まれてこないほうが良い」と、出産に関しては「産まないほうが良い」と主張する（反出生主義に関しては、昨年一〇月号の『綴葉』で組んだ特集「いのち」も参照されたい）。

こうした反出生主義の考えは、あのゲーテの『ファウスト』（中公文庫）にも見て取ることができる。老ファウスト博士は、哲学、法学、医学、神学を、底の底まで研究したが、それでも自分がこの世界に生きる意味を見出すことができない。彼は己が生を嫌悪し、嘆く。「だから、この世にあることはおれには重荷だ。／死こそ望ましく、おれには生が呪わしい」と。なかでも悲劇第一部「牢獄」に登場する次の台詞は、反出生主義の思想を端的に言い表したものであるとして印象的だ。ファウストは叫ぶ。「ああ、おれは生まれてこなければよかった」と。彼は己が誕生の事実を否定せんとするのだ。

そしてこの『ファウスト』を、反出生主義の観点から、「生命の哲学の物語」として読み解いた本がある。それが、森岡正博著『生まれてこないほうが良かったのか？』（筑摩選書）だ。本書は、宗教、文学、哲学という三つの領域を横断しながら、古今東西における反出生主義のあり方を考究していく（なお、本書の副読本として、二〇一九年十一月の『現代思想 特集Ⅱ反出生主義を考える』（青土社）をおすすめしたい）。

とりわけ森岡とヨナス研究者の戸谷による討議は必読だ。この意欲的な著作が目指すのは、「生まれてこないほうが良かったのか？」という問いに対して、「生まれてきて本当に良かった」と答えること、つまり誕生肯定の可能性を探ることだ。そこで導きの糸となるのが、ニーチェの永遠回帰と運命愛をめぐる思想である。

反出生主義者であるショーペンハウアーやベネターは、人生がたとえどんなに喜びや快楽に満ち溢れたものであったとしても、そこにはほんの少しでも痛みや苦しみが生じれば、生まれてきた価値はすべて失われると論じる。だがニーチェはその逆を行く。ニーチェは、「私の人生にたとえこれほどたくさん苦しみがあったとしても、『私の生はこれでよい』と心から思える瞬間が一回あるだけで、それらの苦しみを含んだ人生が全体として肯定されると主張する」のだ。彼は、生を、そして誕生を肯定しようとする。ゆえに著者は、ニーチェを誕生肯定の哲学者とみなし、そこに「一筋の光を見出す」。

反出生主義を超えて誕生を肯定すること——評者はこちらの方向に魅力を感じてしまう。では、あなたはどっちだろうか？（はや）



まずは「ウイグル問題」を知ることから

評者の立場表明

最初に明らかにしておくが、評者はウイグルにおける人権問題（以下「ウイグル問題」とする）について、中国政府に強く抗議する。そして、この問題について日本で一層多くの人々の関心を集めることが出来ればと考えている。それ故に今回は、出版されるや忽ち話題となった一冊、『在日ウイグル人が明かすウイグル・ジェノサイド 東トルキスタンの真実』（ハート出版）を紹介したい。

本書の特徴

著者のムカイダイスはウルムチ（現新疆ウイグル自治区の区都）生まれのウイグル人で、現在は日本で文学を研究する。数年前からウルムチの家族や友人とは連絡が取れず、ウイグルのことを日本に伝えたいという思いから本書は生まれた。まずは本書の構成を説明する。最初にウルムチでの著者の幼少期が語られる。次いでウイグル族が少数民族によって企図された「東トルキスタン」の独立と瓦解の歴史、並びに中国政府による自治区設置の歴史、そして残酷な「強制収容所」の実態とそこを逃れた者たちの証言、最後にウイグル文学の歴史からなる。自身はウイグル専門の学者ではないと著者は述べるが、この本を読めば「ウイグル問題」の大まかな概要は十分掴める。本書には更に、「人権問題」の告発だけでなく、生まれ故郷ウルムチに結びつく著者の複雑な思いも映し出されている。むしろここにこそ本書の特徴はある。この点をもう少し見てみよう。

子供時代を語る彼女の調子には、故郷への愛しさが溢れている。「ウルムチの面白さは、ウルムチに暮らす一四の異なる民族、即ち言葉も宗教も考え方も違う人々の織りなす不思議で魅惑的な暮らし

である。」そんな「面白」い街には様々な民族のお店が並び、父とよくチャイ、ナン、オムレツ、饅頭を堪能した。また彼女には色々な民族の友がいた。各々が自分の言語で話しながらも理解し合えた「あの頃」を懐かしみ、そのまま彼女は漢民族の親友と結んだ「約束」の想い出に行き当たる。将来は博士、軍人になると誓い合った親友・小強。実際に軍人となった彼に今、著者は投げかける。「私は日本で博士になるまで勉強した。しかし、あなたは新疆軍区でトップになったそうですね。私はあなたに何と言えはいい？」先ほどの調子は息を潜め、ここにあるのはただただ言葉ならぬ苦しみだ。あえて繰返すが、本書にあるのはウイグルの苦難の歴史、中国政府による残酷な「暴力」と人権侵害の告発だけではない。家族、友、自然、街、文学への著者の複雑な感情も、随所に深く刻まれている。

本書から考えてほしいこと

本書の意義深さは確かである。だが気に掛かる点もある。「日本」があまりに美化されて言及される点だ。例えばこの一文。「アジアには、命の尊厳を大切にする精神文明を有する、日本のリーダシップが必要不可欠である。」命の尊厳を大切にする精神文明、そんな貴きものを「日本」は有するののか。もしそうならば、なぜ危険に晒され国を逃れた者を拒み、剩せ不可欠な治療も施さぬのだろうか……

まずは知ることだ。同時に覚えていて欲しい。「問題」について知る時、私たちは、「問題」との関係において自身の立場も問い直さねばならないのだと。様々なイデオロギーの言説が交錯する「問題」なればこそ、注意深く著者の声を拾い上げてほしい。（リンドア）

（二四八頁 本体一四〇〇円 3月刊）

編集後記

正確に言えば三年前の6月号の編集後記、私は梅酒を作る話をしていました。人の手によらない何かが生きて果実酒が出来、人はそれを待つ、と。梅酒は飲み干され、時間は経ち、今年もまた巡り巡って梅の雨の季節が再び来ました。ただし今年は春からして早かった。たとえば花の咲く時期、桜は3月末に満開を過ぎ、藤やツツジは4月下旬にはかなり開花が進んでいましたね。そして梅雨が来るのも。何か自然が生き急いでいるような、焦っているような、そんな感じを受けたものです。

もっともこれは人間の側の焦燥を投影しているにすぎないのかもしれない。終わるようにみせかけて延ばされていく緊急事態宣言、じりじりと増える感染者。夜になると灯りの消える巷。同じように流れる時間に満ちているのは穏やかさよりも暗い不安になってしまったように思える。だからもう一度、梅酒を作りましょう。酒が「出来る」のは人の手によらない。けれど、材料を「用意する」のは人間だ。用意しましょう、味わい深い酒となるように。そして、この先に酒を酌み交わすことが出来ますように。(ねこ)

当てよう! 図書カード

実は最近京都に引っ越してきたのですが、思った以上に街中に銭湯があり驚きました。湯巡りが趣味の私にとってはとても嬉しいです。そこで今回は、京都市内の銭湯に関する問題です。次のうち、最も温度の低い水風呂を持つ銭湯はどれでしょう?

1. 白山湯
2. 山城温泉
3. 鴨川湯
4. トロン温泉稲荷

(茫漠)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。ウェブサイト (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) からの応募も可能です。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。応募の締め切り日は7月15日です。

3月号の解答

3月号の「…いまも続く絵画教室といえはば?」の解答は4. 関西美術院でした。窓からの自然光が美しく、建物の歴史と相まって芸術に浸れますよね。

図書カードの当選者は、は一さん、ハードラーさん、(*・*)さん、合気野郎さん、かえるさん(順不同)です。おめでとうございます。(きもの)

読者がらひつじ

○最近自炊をはじめました。料理をしてみるとレシピ本含め、グルメガイドやエッセイ、食材研究と食にまつわる本が沢山あることに気付きました。編集委員のおすすしめがあれば知りたいです。(農学部・*・*)

— 自炊はいいですよ。コロナ禍で外食できなかつた分、自炊に凝ってしまふ日々です。美味しい料理を作ると何故かお酒がすすんで困ったものです。「食」は人類普遍のテーマで一人暮らしの学生さんも興味がありますので、近々特集で扱えたらと思います。

○図書カード受け取りをサービスカウンターで出来ませんか。(職員・よつさん)

— 遠方の読者も多いことや、編集委員の業務範囲という理由で郵送を採用しています。コロナ禍で直接は難しいですが、今後改革の可能性もあると思います。(きもの)

訂正とお詫

『綴葉』5月号(No.357)の表紙に記載されていた「日本の包茎 男の体の2000年史」の著者名に誤字がありました。正しくは「澁谷知美」です。著者の方はじめ、関係者の皆様には深くお詫び申し上げます。